

佐方 鎮先生 喜多見さき先生
下田 次郎先生 下田 たつ先生
關根 正直先生 杉 敏介先生
早川 いく先生 千葉 安良先生
高橋 つま先生 高橋 スエ先生
吉川 りよ先生 三上 エミ先生

○賛助員

本校卒業生にて從來本會會員たりし諸姉は前記の規定により賛助員となられ候されど貴名は特に掲載仕らず候

○新賛助員

和歌山縣 町立橋本實女
鳥取縣 鳥取高女
福岡縣 柳河高女
靜岡縣 町立大宮實女
宮崎縣 師範學校
熊本縣 熊本高女
東京 女高師附屬高女
山口縣 玖珂郡立岩國高女
新潟縣 相川町立實女
北海道 小樽高女

福島縣 會津高女
鹿兒島縣 第一高女
靜岡縣 女子師範
茨城縣 水戸高女
滋賀縣 彦根高女
岡山縣 玉島町立實女
東京 女高師附屬小學
愛知縣 市立名古屋高女
廣島縣 三原女子師範
山口縣 佐波郡立高女
佐賀縣 私立成美高女
香川縣 組合立白山高女
宮崎縣 宮崎高女
石川縣 江沼郡立實女
香川縣 高松高女
新潟縣 高田高女
大分縣 町立臼杵實女
石川縣 能美郡立實女

川村 はな
加賀山 貞
吉永 ふみ
竹尾 恵子
竹田 倭子
田中 元恵
高橋 スエ
土屋 つわ
筒井 たか
中島 喜久
中西 ヒサ
中川 絹重
上村 しづか
小林 きしの
櫻井 藤枝
白鳥 シロ
森 とみ
關 かれ

○新入會員

文科一部二年生
伊藤 ふき 長谷ちかよ 別所 ひで 太田 ヨネ
荻野 よしの 奥野 健野 笠井 たつ 横井満茂野
武川 正代 山田はな子 山中 たか 馬庭 トシ

古河まつゑ 安部 トキ 齋藤 レイ 佐藤 ヤス
木村はな 水野 ひで 日比野 貞 鈴木美興喜
中村 嘉津 中島 ヒサ 上田マサノ 中山ヤチヨ
川上 靜江 倉田 松代
文科一部一年
新田 薫 小曾戸ヨシ 和田 胤子 蚊泉 靖子
田中 好江 山下 マツ 安吉 ます 前田 のぶ
江見 セツ 神 ヅヤ 平井 せつ 常陸 伊よ
鈴木 康 須田しげ代

○賛助員移動

芦川 春子 高田市樹形十一に移轉
大鹽 せつ 兵庫縣明石女子師範に轉任
加藤 雅 退職
重松しげの 兵庫縣加古郡立高女に轉任
寺山 まつ 埼玉縣川越高女に轉任
安岡 寅恵 滋賀縣賀科長瀬高女に轉任

●第二十三回文科學術談話會

去る五月十一日午後一時より當校講堂に於て第廿三回文科會を開催せり
講演順序は左の如し。

一開會の辭

下村 先生

一純文學に就きて 文學博士芳賀矢一先生
一關東平野の交通線路 文四 岩田 フミ
一俳諧に就きて 文三 初鹿野とみ
一知行の關係 文四 福田 ふめ
下村先生より開會の辭に次ぎて今回新に成立せる學術談話會に關する規程を承り、それより豫定の通り講演ありて午後五時に閉會せり。會場の一隅には甲冑標本及中古時代裝束の標本を陳列して會衆の觀覽に供したり。當日は校長先生はじめ關根先生、荻野先生、下田次郎先生、下村先生、下田たつ子先生の御來臨あり卒業生諸姉も亦數名來會せられたりき

◎第二回會計決算報告

収入 金六拾八圓六拾壹錢也
内譯
四拾貳圓拾壹錢 前回よりの繰越金
貳圓拾錢 卒業生會費
貳拾四圓四拾錢 生徒の二號會誌代
支出 金四拾九圓七拾五錢也

内譯

四拾七圓五拾壹錢 會誌第二號印刷代
貳圓貳拾四錢 會誌送料
差引殘高金拾八圓八拾六錢

●會費領收

四十四年度分
江口 折枝
四十五年度分
佐々木 孝 江口 折枝 湯川 たき 竹田 菊
橋本 ヒサシ 松島 鐵 水島 いく 豊島 春江



交 詢

八十

安岡 寅恵	島津 ミチ	吉場 のぶ	森山 まさ
澤田 秀	小堀 くま	市瀬富貴子	稻葉 みつ
半田 タマ	濱野 ひで	長谷川スカ	堀尾 トメ
千葉 安良	大池ふさよ	渡邊 梅	河崎 なつ
川村 はな	加賀山 貞	吉永 ふみ	竹尾 恵子
竹田 倭子	田中 元恵	高橋 スエ	土屋 つね
筒井 たか	中島 喜久	中西 ヒサ	中川 絹重
上村しづか	小林さしの	櫻井 藤枝	白鳥 シロ
森 さみ	關 いね	林 はる	

四十六年度分
林 はる

●母校便り

○桃櫻既に去りて緑陰なつかしき夏は来り候、
ああ緑葉の私語、如何に希望多き聲には候はず
や。本校三百の生徒は今や彌、この私語に奮ひ
起ちて孳々切々學業にいそしみ居り候。夕暮雲
の遠方に流るゝ時、夏草踏みて。校庭のそゝる

離別を惜しむ、悲喜交至とは實に同夜の感に候
ふべし。

○同卅日卒業式舉行せられ候。螢雪の功なりて
かざす桂の花の枝、家の風をもと祈りし君や如
何に喜びの眉開きて待ち迎へられけんと察せら
れ候。

○四月一日より十日に至るまで春季休業。行季
の底深く忍ばせし解き洗ひ衣の小ザッパリと拾
なごにや縫ひかへられ候ひけん、さても櫻花に
妨げられざりきや如何。

○四年生全部は此の休業期を利用し三月卅一日
午後十一時新橋を發し、伊勢奈良京都大阪等に
修學旅行致し候。或は古き都の迹を尋ね或は新
しき事物を知り百聞は一見に如かずと且つは驚
き且つは喜びて、四月九日午前七時再び都の人
と相成候へば、すでに東都の花は旅の人を待た
ずして徒に根に返り、茗溪河畔そゝる晩春の愁
を感せしめ候。

○同十日は新入生の入舎と四年生全部の牛込區
赤城元町第三寄宿舎に移轉との大活動を致し

歩きこそ、卒業生諸姉が此の頃の思ひ出でかと
存せられ候。

○過去三ヶ月間に於る事ども些御報道申上ぐべ
く候。三月廿七日満都の花雲漸く春色を装はん
とする時、かの大講堂に於て例年の如く卒業生
送別會相催され候。諸姉が成業を祝し、はた、

候。四年生の移轉は從來の寄宿舎が狹隘となり
し爲め先生方の種々なる御協議に出でたる結果
に御座候。人は兎角古きに執着する性のものに
候なつかしき父母の膝下を離れては二なき三年
間の我家なりきよ、と願ればあすは復見得べき
家根の瓦さへ殊更のなつかしさを感せしめ候。
かくて旅行の疲れと移轉の寂しさを抱きつゝ、
新しき家にあかし候一夜はなかなか思ひ出深
き種をどいめ申候。まして新入の諸子は千里故
郷を思ひて馴れぬ藁布團の上幾度寝反りし、折
角語りし父母の聲は夢と醒めて、そぞろに便り
なさをひしひしと感せられ候事と存じ候。かく
て移轉せし四年生も新しき生活に入りし一年生
も共に待ちし月日を漸く六十日と數へて、今日
此の頃は早暑中休暇の樂しさのみ毎夜夢に入る
事しきりと相成候。

○五月六日初夏の光景清新なる一日、稻毛の海
濱に郊遊會致され候。海を見山を見邪念なく妄
念なし、海に入りて貝を拾ふものあり、畑辿りに
千葉町を訪ひしものあり、とりどりに歡を盡し